

言いたいことなんて 何もないって

大きな声で言いたい。

創星 ★ ★ vol.2
PRESENTED by STARDUST BOOKS
TAKE FREE

創星

- 03 a story of the other night
- 08 思えば、東京
- 10 デタラメ
- 11 サブカル対談
- 18 詩
- 20 イヌとペンギン
- 24 妄想百景
- 26 about movie
- 27 チキンボール
- 31 魚の皮膚
- 39 あとがき



音

まず、テレビの音が邪魔になった。一日中つけっぱなしにしていたテレビを全く見なくなつた。部屋には音があふれていた。時計の音、ストーブの音、冷蔵庫の音。そのひとつひとつが邪魔になって、ひとつひとつのスイッチを切つた。スイッチを切るたびに、小さな部屋が世界から少しづつ切り離されていくような感触があつた。わたしは少し寂しくて、すこし安心した。わたしは音が怖かつた。動く足音がしてしまふので、わたしは一日をできるだけ動かずに過ごすため苦心した。ただ音はなくならなかつた。

呼吸の音。

心臓の音。

まばたきの音。

いつの間にか、わたしは音を探していた。どんなにスイッチを切つても決して消えない音。それはどこにあるの。

おやすみと言いきり寝たねことと窓のむこうで夜が始まる



癖

癖になるのはこわい。

終電の行った駅のホームに蹲りながらつくづく考える。

(止められなくなってしまうから。)

わたしはゆつくり体を返すと、鉄鋼で覆われた屋根の隙間から見える夜空の端っこをしばらく眺めた。体をまっすぐに伸ばして空を見つめる。人通りはまったくくない。ホームに寝転んでいたら、酔っ払いと思われぬ。

(だから大丈夫。)

仕事が忙しく、終電で帰ることが日常になっている。ある日電車を降りたと同時に倒れこんだ日から、訳もなくホームに寝転ぶことが癖になっている。

小さな振動が起こり、電車の音が近づいてくる。対向車線を貨物列車が通り過ぎる時、風がホームを切り裂いていく。まっすぐに上を見ながら、私は風の音を聞いている。帰る場所はあるのに、帰れないのはなぜだろう。

横たえた体の重みを感じながら、わたしは少し自由でいる。だから、癖になるのはこわいのだ。

こめんって謝るのだったただの癖すべての言葉吸い込んで、空

正しさ

できればその正しさを共有したいと思っ
てはいるんだけど。

正しさを表裏に飾る雨の日に雨が降
らなくていいの正しさ



必要

必要ないってことがわかったから。

女友達は極めて冷静に恋人との恋の顛末を語った。わたしは沈黙を守った。彼女の恋が観客を求めていることを知っているから。

あの人にとつて、わたしは必要がないの。それから彼女は少し黙ってコリアを一口飲んだ。必要がない、ということを知ったしはすつと前から知っていた。知っていたのに、離れることができなかった。わたしはすつとすつとあの場所を離れた。

だけど、そう言つて彼女は言葉を切った。

もう必要ないの。

それからわたしはゆっくりとコリアを飲みほした。

いたってただでいるだけ真夜中の草原ナイフみたいにやさしい



思えば、東京

一路 真実

電車で小説を読むと、よく乗り過ごす。

何か考え事をしているときも、降りられない。気付いたら、高田馬場ではなく目白にいたり、気付いたら、乗り換えの飯田橋が通り過ぎて行ったりする。その日は行きも帰りも、顔を上げた瞬間に降りる駅が目の前にあった。

「何だかそういうときはきまって降りたくなくて、できることなら小説を読み終えるまで座っていたくなってしまふ。」

エスカレーターの右側を人が走っていくときや、電車の中が満員で「みんなどこにそんな用事があるんだ」と思うとき、相手からぶつかってきたのに謝られないときなどは、

「なんで東京に来てしまったんだろう?」
と後悔する。そしてそのまま、東京の街を歩くことが嫌になってしまう。

東京に六年間住んでいた。東京は、カラフルだ。住む人によってどんな色にでも変化する。カラフルな蛇のようだ。

しかし、爬虫類は少々意思疎通が図りづらい。とれだけ一緒に暮らしても、いつの間にか勝手に逃げ出す。そして、六時のニュースで話題になる。

そうした事件が、実際に起こった。

逃げ出した蛇は、結局、高田馬場の公園で発見された。見つかったら、爬虫類のくせして飼い主の腕にすり寄っていたという。

東京は、そんな街だ。

知り合いと飲んだ帰り、外で立ち話をしていると、

「みんなこうして東京にいるんだから、また集まりましょうよ。そのときには、私が作った野菜をみんなに配りますよ」と言われた。

顔見知り程度の知り合いだったが、そう言われたときに気付いてしまった。飲んでいる最中に連絡先を交換したときよりも、その立ち話の方が私は何だか心地よかったのだ。どうせ連絡なんかしないのだろうと思いがながら、番号を打ち込む作業は辛い。連絡先を知っているという安心感だけでは、人はつながっていけないことを知っているからだ。だからこそ、その一言が温かかった。インターネットやメールのみのバーチャルな関係ではなく、こうして東京に根付く人たちとつながっている。なんとなしにネットワークを広げ、自分も東京でやっていけていたのだな、と思う。

それだけではない。その後、みんなばらばらの方向に帰ることになって

思った。

その場にいる人々にそれぞれの月曜日が来るのだ。

そのことに対して、「ああ、東京にいて良かったな」と思った。そういう一瞬の「ああ」という気持ちを大切にしながら生きていきたい、と思った。

一年ぶりに東京へ旅行に出かけた。

昔住んでいた街を歩いていたとき、ふいに通りすがりの女性に道を尋ねられた。

「まっすぐ行って、左の坂を上がったところですよ」
そう教えて、再び歩き出すと笑いがこみ上げてきた。

私は旅行者だ。

でも、この街を知っている。

昔住んでいた街は、全然懐かしくなかった。むしろ、私はまだあそこにいるのだ。私の魂はあそこに居続けているのだ。過ぎていった日常や溢れ返った希望や叶わなかった想いがしこりのように生き続けている。

その感覚が、逆に私を自由にした。今のこの私は、どこにも縛られていない。今のこの私は、世界中の誰でもない。今、ここを歩いている一人の

人間でしかないのだ。旅行者でも居住者でもない、一人の人間。

やっぱり意思疎通は図りづらい。

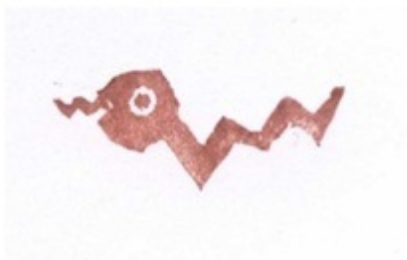
でも、何度逃げられてもいい。

噛まれたって構わない。

ようやく見つけた微妙な距離。

東京という蛇が、私の前でとくろを巻いた。

(終)



〔絵・鳥丸フルミ〕



デタラメ

詠人不知（よみびとしらず）

出たら芽、芽が出るにはね、出ると言うより出なきゃね、芽はさ。

今日の朝がた、昨日の深夜過ぎ、どちらも同じようで違う気がして、フラットとシャープにも似た呼び名の違うヤツを根底から考え直そうと、アルコール漬けの一夜漬けで一人モクモクと煙草をふかしながら黙々とやっていたら、こんがらがり、転がり、殺すか否か、そろそろ田舎に帰ろうかなどと、おどろおどろしい声でつぶやいてみたり、金切り声で泣くスピーカーに耳を傾けるふりをしてみたり、シマシマのパジャマで隣の民家に勝手にお邪魔しようかなどと、さっきから殺気立ってるじゃんけん負けっぱなしの右手が勝手口で生意気なので、いっそのこと、居候にしろよあほうと抜かし、左手ならごぼう抜きなんじゃないのと大根足の胡瓜婦人がじゃがいもみたいな面で茄子がままにドレッシングしようとしやがる。

どれを？どれをうたう？

謳い文句は決まらず、社会のうねりに飲み込まれ、うねうねとくねくねのダブルブッキングにぶるぶると震えながらも、ぐずぐずと愚図を描けば何故か、成せばなるよとクスクス笑いが込み上げてきた。

そのうち、クスクス笑いだったはずが昇格し、クスクス笑いのリーダーになり、気付けばクスクス笑い主任になった頃には、もうクスクスどころではなくなり、むしろスクスクと成長した事から、スクスクなどと皆から呼ばれ慕われるようになり、果てはスクさん、スク様、好く男No.1、スクメン、スメン、素面、とアルコールももはや完全に抜けてしまい、朝日が出てしまい、出たら目、目が白から赤に変わっても、違うようで同じであり、要するにこの事態、この字体、この私自体、デタラメなのであった。

出た目の数だけ前進やら後退やらを繰り返し、挙げ句の果てにはスタート地点に戻るような人生ゲーム。

私は今ここにILL。

鳩山 × 一路 サブカル対談

第2回

私たち2人が
映画・小説・漫画等について
好き勝手に語ります。

お相手は、

はとやま



お相手は、

いちろ



第2回目のテーマは、「青春映画」です。

鳩山：一路さん、青春を感じる映画はありますか？

一路：うーん、やっぱり好きな映画は『リンダリンダ』だね。

鳩山：あー、私も大好きな映画です。

一路：文化祭が中心でしょ。だけど、「文化祭に向けて頑張る」というのが青春っていうよりは、「あの時代」というものの自体に青春を感じるんじゃないかなと思うんだよね。

鳩山：『スウィングガールズ』とか『ウォーターボーイズ』とかが流行った時代だったよね。『フラガール』とかもさ、素人が何か頑張ってるって感じの流れの中に、『リンダリンダ』もあった。

一路：だけど、単に「うまくいって良かったね」とって終わるような感じじゃないんだよ。そうやって何かに向けて頑張るっていうのが青春かもしれないけど、私としてはそこに青春を置きたくないわけ、みんな頑張るっ

① 山下敦弘『リンダリンダリンダ』(2005年)
② 安口史朗『スウィングガールズ』(2000年)
③ 安口史朗『ウォーターボーイズ』(2001年)
④ 多田道太郎『フラガール』(2002年)

てことがイコール青春にしたいくないわけ。
 鳩山…じゃあ、『ウオーターボーイズ』とか
 と『リンダリンダリンダ』はどこが違うって
 考えた？

一路…うーん、やっぱり成功しないってところ
 が私はポイントだと思ってる。

鳩山…成功しなかったっけ？

一路…成功したっけ？ 音楽は演奏できたよ
 ね。雨が降ったから、みんな体育館に来て、
 最終的に客もたくさん増えた。

鳩山…成功はしたんじゃないの？

一路…うん、音楽自体は成功して終わったの
 か。

鳩山…あの4人が寝坊して遅刻するんだけど、
 怪我した子とかが間を持たせて。成功した先
 までは描かれないんだけど。エンディングは
 「いくよー」ってところで切れて、ブルーハ
 ーツの曲になる。

一路…「リンダリンダ」は流れるんだけど、「僕
 の右手」が流れないんだよね。

鳩山…そう。で、エンディングの曲にかぶっ
 ていくんだよ。

一路…そっか、そうだったね。音楽自体は成

功するんだけど、ライブ中のカットが暗い下
 駄箱とか暗い廊下とか、そういうのを入れて
 くるんだよ。成功してる音楽をやってる合間
 合間にそういう暗いカットが入るところが、
 私は暗い学生生活を送ってる人たちに頑張
 りつつメッセージを送ってる気がしたわけ。

だから、成功だけじゃない部分を感じたから
 こそ、良かったのかなって思ってる。諸手を
 上げて「良かった！」って印象が残るんじゃ
 なくて、ちよつと暗い感じもあったところが
 良かったと思う。

鳩山…最後、前田亜季に「好きな人に告白で
 きた？」って聞いて、「できなかつた」って
 笑って終わるよね。そこもちよつと不達成感
 が描かれてる。でもそれが否定されてるわけ
 じゃなくて。

ただ、あれ系の話って多々あるけど、撮っ
 てる人の、その人その人のちよつとした違い
 があるよね。高校生を描いてもさ。高校生
 ものって、他に何がある？

一路…だからさ、まず高校生ものでいいのか
 っていう問題があるでしょ。

鳩山…あー青春映画の定義だね。

青春映画の定義

鳩山…青春映画に絶対に入る三力条みたいな
 のが決まったらいいね。

一路…三力条（笑）いいね。

鳩山…例えば「エロ」「ダチ」「夢」とか（笑）
 『ルーキーズ』^⑤とかわかりやすい基本形態
 だよ。青春映画の基本形態はあれかもよ。私
 たちがあまり得意としない分野だけど（笑）

一路…確かに。友達がいて。

鳩山…マネージャーがかわいいみたいな。

一路…夢をかなえるストーリーっていう感じ
 も。

私がT S U T A Y Aで『天然コケッコー』
^⑥を借りる時、「ノスタルジーにひたる作品」
 って書かれてて、それって「制服」からきて
 るイメージなんじゃないかなって思ったの
 ね。だから一般的に、「制服」＝「青春」な
 のかなって。『花とアリス』^⑦とか。岩井俊二

⑤ 平川雄一朗『ROOKIES・卒業』（二〇〇九年）

⑥ 山下敦弘『天然コケッコー』（二〇〇七年）

⑦ 岩井俊二『花とアリス』（二〇〇四年）

も青春映画だと思っのね。

鳩山：『四月物語』^⑧とかね。「愛の奇跡と呼びたい」って言って終わる（笑）

一路：『四月物語』とかまさにそうだよ。

あと、『リリィシユシユのすべて』^⑨とか暗い青春って感じだし、『Love Letter』^⑩もそうかな。そういうノスタルジーっていうか、思い返すものとしての青春っていうのが要素としてあるよね。

鳩山：「青春」って呼んだときにもう思い出なのかな。結局、過ぎた後にあれが青春だったって思うものもんね。

一路：『グッバイ、レーニン！』^⑪を観たんだけど、「オスタルギー」って言葉があるのね。

ドイツ語で。「オスト」が東側って意味で、あとはノスタルジーかな。つまり、ベルリンの壁が崩壊して、統一ドイツになった後に、東側を懐かしんで「でも、東もそれほど悪くなかったじゃない」って思うことらしいの。だから、自分の青春を「それほど悪くなかつ

た」って思い返すっていう意味で、ノスタルジーも青春映画の要素としてあるんじゃないかと思うんだけど。

鳩山：そうね。だとしたら、そのノスタルジーは実際に過去に経験したもののなか、そうではなくて過去こういう経験ができれば良かったのっていう思いなのかっていう違いがあるよね。でもいわゆる青春映画のような青春を送って来た人って少数派だと思うのね。大半は、そういう経験とかあったのになって思う。

一路：たぶん、大半は「ああこういう青春しなかった」って思いながら観てるんじゃないかな。

鳩山：思い出と憧れが混ざり合ってるのね。そういう現実と憧れに対する距離の取り方が、それぞれの青春映画を作るのかもね。成功しないところが良いって言ってる一路さんは、やや現実寄りとかさ。

青春映画ではない映画

鳩山：『俺たちに明日はないっス』^⑫と同じ原作者のさそうあきらが描いた『コドモのコードモ』^⑬では子どもたちだけで妊娠・出産を解決しようとして、大人の不在なんだけど、でも青春映画ではないよね。

一路：そこよね。青春映画ではない映画ってどんな映画かってことよね。

鳩山：逆側から攻めるみたいなの。

一路：だから、難しいよね。ただ、『コドモのコードモ』はある意味青春映画とも言えるよね。みんな子どもができたってことを乗り越えるわけじゃん。

鳩山：だから「ダチ」「エロ」「夢」はあるよね（笑）だけど、あれを見て青春映画とは言えないよね。

一路：似た系統で、『14才の母』^⑭とかドラマであったよね。

鳩山：だけど、青春ドラマっていうよりは、「妊娠もの」ってジャンルだよ。

一路：確かにそのジャンルある（笑）妊娠ものっていうジャンルが青春映画に含まれな

⑧ 岩井俊二『四月物語』（一九九八年）

⑨ 岩井俊二『リリィシユシユのすべて』（二〇〇一年）

⑩ 岩井俊二『Love Letter』（一九九五年）

⑪ ヴォルフガング・ベッガー『グッバイ、レーニン！』（二〇〇二年）

⑫ タナダユキ『俺たちに明日はないっス』（二〇〇八年）

⑬ さそうあきら『コドモのコードモ』（双葉社、二〇〇五年）

⑭ 井上由美子『14才の母』（日本テレビ、二〇〇六年）

いんでしょ？ それは、別のところにテーマがあるからじゃない？ 青春映画は特にテーマがないんじゃないの。

鳩山：妊娠っていうのは、現実なんだと思う。現実の方に傾いちゃってるんだよね。青春は、性を獲得するまでの話なんだと思う。「童貞もの」っていうか。

一路：あるね。『Stand Up!!』^⑧とか。

鳩山：そういう子どもから大人へっていうか。少女漫画でいう片思いから両思いになって物語が終わるみたいな。やっぱり、青春映画は現実じゃないっていうのがポイントだよ。一路：だけど、非現実すぎもしいと思っただけで、でも、そこにノスタルジーが加わることで、観てるこっちも非日常にさせられる。日常・非日常の両方を含みながら。

鳩山：ファンタジーではないもんね。

一路：そう。内容自体は現実んだけど、観てる方は日常じゃなくなってしまう。

時代を切り取る装置としての「卒業」

鳩山：『白線流し』^⑨とか私の中では、ザ・青春ものって感じだよ。

一路：時間軸長いよね。高校生から大学に入ってる。

鳩山：『北の国から』^⑩のポストを狙ってるんじゃないかって感じの（笑）

一路：でも、『北の国から』は青春ドラマじゃないよね。

鳩山：あれはもう「大河ドラマ」だね。

一路：大河ドラマって（笑）

鳩山：最初の子役がすごい大きくなってね。

実際、結婚も離婚もしたよ（笑）

一路：あれは長すぎるな。そうするとやっぱり青春って、時代を切り取らなければいけないってことよね。人生全部みたいな感じじゃなくて。やっぱり「ある時代」ってことよね。鳩山：そう思うと、「卒業」っていう要素があると思う。時代を切り取る装置としての

「卒業」。「卒業」っていうのをきっかけとして、非現実から現実へっていうね。ラストは卒業でみんなばらばらになっていくのよね。『オレンジデイズ』^⑪とかも。

一路：『天然コケッコー』も。『天使なんかじゃない』^⑫もラストは卒業だしね。全部、卒業じゃん！

鳩山：もうこれは映画の『卒業』^⑬を親ないといけないかもね（笑）親たら青春映画の答えが分かるかも。

一路：やっぱり王道パターンなのかな。

鳩山：卒業によって一定の世界から外に出ることになる。その結果「あの頃」っていうものが出来るっていうか。「卒業」っていうものを最後にすることによって、青春が作られる。

一路：卒業っていうのが、社会的に作り上げられた装置なんだよね。子どもから大人へ切り替わるっていう、そういう概念としての、「卒業」なんだ。だから、私は破壊的な思想

⑧ 金子ありさ『Stand Up!!』(TBS、二〇〇三年)

⑨ 信本敬子、原田裕樹『白線流し』(フジテレビ、一九九六年～二〇〇五年)
⑩ 倉本聰『北の国から』(フジテレビ、一九八一年～二〇〇二年)

⑪ 北川悦吏子『オレンジデイズ』(TBS、二〇〇四年)
⑫ 矢沢あい『天使なんかじゃない』(集英社、一九九一年～一九九四年)
⑬ マイク・ニコルズ『卒業』(一九六七年)

だから、そういう感じじゃなくて全然違う形態の青春映画を考えたんだよね。

鳩山…『卒業』の映画の中で、「卒業と同時に出る答えなんかない」って言ってたよ。

一路…(笑) それは深いね。

鳩山…装置としての、「社会的な卒業」と「個人の卒業」は違う。だけど、そうはいってもずっとそのままだったら人間って変われないじゃん。やらされるってことも重要だと思うんだよ。ライフステージが変わっていくことで、内面も変わっていくし。大人って「なるもの」じゃなくて、「ならされるもの」だと思うのね。

一路…そうね。

鳩山…だって、ならなくていいって言われたら皆ならないでしょ。だから、ならされるものなんだよ。たとえば、生まれなくていいよって言われたら生まれないことを選ぶ人だってたくさんいる。けどまあ、気が付いたら存在させられてた。だからこそ主体的に存在する道を皆探していく。

一路…だけどさ、大人にならなくてもいいよっていう状態をどうにかして作りたいんだ

よ。

鳩山…個人のレベルではできるよね。自分が大人にならないって言ってしまえばいいじゃん。自分がそれでいいなら。

一路…いや、違うんだよ。個人のレベルでは絶対できるんだけど、それを社会的にやりたいわけ。

鳩山…(笑)

一路…だってさ、個人でそれをやろうとしたら、なんか排除された人々になってしまうじゃん。だから、その社会の輪の中で、大人の輪の中で、大人じゃないっていう状態を作りたいわけ。それをどうやって叶えるかっていう。

鳩山…だけど、結構いるじゃん。昼は大人、夜は子どもみたいな。輪から外れないっていうか、スーツでバスケやるとかね。

一路…そうね(笑)

大人とは？子供とは？青春とは！？

鳩山…『俺たちに明日はないっス』の終わり

はね、高校の卒業式なわけ。高校時代はエロいことに明け暮れてて、主人公が「明日から何しよっかなあ」って呟いて、「そして僕は初めて明日のことを考えた」って言って終わるの。

一路…その終わり方は、明日のことを考えるのが「大人」ってこと？

鳩山…そういう意味で私は受け取った。

一路…なるほどね。高校時代は、過去にも未来にも縛られていない時代だったっていうことだね。

鳩山…そうだね。で、未来に縛られだすってこと。

一路…ってことは、何にも縛られないっていうことが青春ってことなのかな。

鳩山…それは、「大人」と「子ども」って問題だと思うのね。性的な経験をいつするかっていう話題とかあるじゃん。それも子どもから大人へってことだし、縛られてる状態とそうじゃない状態っていうのも、子どもと大人ってことだと思っし。

一路…『リンダリンダリンダ』のなかでも、子どもと大人ってことが時々出てくるのね。

文化際でやった韓国文化教室で、子どもの線と大人の線のどちらからダーツみたいなのを投げるかってシーンとか。それで、『スウィングガールズ』とかとは違うって私が思ったのは、青春映画のなかの「子ども・大人」観が私と合うか合わないかで、『リンダリンダリンダ』は合ったのになって。

鳩山：「子ども・大人」観ね。

一路：そうだね。あと、私が思ったのは、『天然コケッコー』は大人がみんなやさしいんだよね。それを思ったときに、優しくない大人が出てきてもいいのになって思ったんだ。『エヴァンゲリオン』²²のテレビ版はさ、「お父さん」怖い、「お母さんに認められたい」みたいな感じで、そういう大人とうまくいかないところが好きなんだよね。結局、『エヴァンゲリオン』²³も「大人は見守ってるから頑張れ」的に描かれちゃったけどさ。『天然コケッコー』はそういう温かい大人ばかりなんだよ。私は、同じ監督なんだけど、『リン

ダリンダリンダ』の方が好きなのね。それは、『リンダリンダリンダ』は大人が不在なんだ。先生はちょっと出てくるけど嫌味言う感じの人で、親の話とかも出てくるけど。でも、本当に不在なんだよね。

鳩山：うん、ほんと大人の不在だよ。

一路：私は『バトル・ロワイアル』²⁴が好きだしさ、そういう「敵対する大人と子ども」って感じが好きなんじゃないかって思う。不在っていうのも……やっぱり「敵対」かなと思うし。

鳩山：「俺たちに明日はないっス」も大人の不在かもしれない。男親に育てられてる女子生徒が出てくるんだけど、生理とかも知らないわけ。何も知らないで恥ずかしくなって、結局自力で性を獲得していく。

一路：ああ、大人が教えるんじゃない。

鳩山：よし、やってみようみたいな。それで、もうひとつ、先生と生徒がデキてるパターンがあって、それはもう生徒とデキるくらいのも先生だから、先生としての役割は果たしてない。

一路：なるほどね。

鳩山：最後の先生が、お前たちに希望をもらったとか言って、先生辞めまっすってなっちゃうの。大人の役割を降りる。それで先生と生徒で殴り合ったりして。だけど、結局、生徒自身は明日のことを考えて大人になって感じて終わる。無知だった女子生徒も妊娠して、相手の男は稼業とか手伝うようになって。「現実化」していく。

一路：そうね、でもなんか「子ども」と「大人」というよりは、「子ども」と「現実」みたいな。「日常」って言っちゃうとちよっと違うから、やっぱり「現実」かな。

鳩山：「現実」って何かって考えると、「社会的な義務」とかだとながると思う。

一路：その映画の、「稼業を継ぐ」とかね。

鳩山：子どもができるから、責任が出てくる。一路：さっきの大人の不在の話に戻るんだけど、大人を描かないっていうのは、そういう義務とかを描かないっていう効果があるのかなって思って。その一方で、大人と子どもを対比して描くときには、子どもにそれをやっつてはダメって叱るある意味ステレオタイ

²² 庵野秀明『新世紀エヴァンゲリオン』(GAINAX、一九九五年)一九九六年
²³ 庵野秀明、摩砂雪、鶴巻和哉『エヴァンゲリオン新劇場版：序』(二〇〇七年)

²⁴ 深作欣二『バトル・ロワイアル』(二〇〇〇年)

ブ的な大人像を提示して、そういう義務感に縛られる大人っていうのと対比してるのかなって思った。だからこそ、さっき言った『俺たちに明日はないっス』の先生は良いなって思ったわけ。義務感のない人っていうか

(笑)

鳩山：『バトル・ロワイアル』のなかで、どうして子どもたちに殺し合いをさせるかってところで、北野武の言葉が「大人化しろよ」って言うてるように聞こえた。大人はずい義務だけのために生きてて、子どもは無神経にそれをバカにしたり、大人の裏側知ってるぞ的な発言をするけど、それがどれだけ大変なことかまでは知らなくてすごい上から目線だったりするじゃん。中学生や高校生くらいって。あのバトル・ロワイアル法のシステム自体がよく分からないんだけど、「大人になってみろ」って言うて理不尽な義務を課してるような気がするのね。クラスメイトを殺し合うっていう。

一路：そうね。確かに、子どもを淘汰して最終的にクラスの一人だけを残して、大人にしようっていうことだから、それはある意味、

自分たちと同じ感覚の人を残すっていう意味で、「自分たちになれ」って言うてるのかもしれない。

鳩山：大人はそれぐらい苦しいよっていう。それに気づいてない人に対して怒りをぶつけてるみたいな感じに聞こえた。だけど大人が苦しいから青春が輝いてみえるって構図じゃちょっと悲しいな。

一路：『バトル・ロワイアル』は青春映画って言えるのかな。

鳩山：うーん。『バトル・ロワイアル』と『卒業』を比べると、ストーリーの構図は似てるよね。どっちも、既成の社会規範を打ち破って、自力で生きる道を獲得していくっていう話で。

一路：だけど、『卒業』と比べて『バトル・ロワイアル』の二人の未来は、相当過酷なものに思えるけど。

鳩山：『卒業』も、教会から逃げ出した二人が、笑顔から真顔になるってシーンがラストなのね。自分たちの未来を考えて、最後に真顔になるっていう。大人になるって、そういう感じで、与えられた世界を打ち破ることが

必要なんだけど、その先に全く新しいものがあるわけじゃなくて、結局は世界ってものともっとダイレクトに向き合わなくちゃいけないことになるってことなんだと思うんだよね。

一路：うーん。だけど、やっぱり『バトル・ロワイアル』は非日常な設定すぎて、青春映画とは思えないよ。

鳩山：確かに『バトル・ロワイアル』は非日常だよな。

一路：そう考えたら、青春映画は日常を描くことで、見る人を非日常な気持ちにさせるってことが重要なんだね。

「雨1」

黒い夜空から降り注ぐ雨がコンクリートを濡らしていく、
降り落ちた雨は地表から高く跳ね返り先鋭なかたちがここそこで生まれては消える、
消えては一つのかたちとなり、
ただ冷たいグレーの排水路を流れていくのであっても、
それでもかたちとなりある一方へ流れていく、
その流れの中にあることは安全で安心である

「雨2」

どの瞬間にもヴェールがかかる、
見える景色は透明で私も透明である

入念に手入れされた花壇に咲き誇る真夏の花は簡単にパチリと生命を断ち切られ墓前に捧げられる、ここは母の王国であり私は客人であり、私は母を見る

夜が空を浸し始め黄昏が青草に沈む
彼方へ昇る神楽の舞も終わり、子供であることも時間切れとなる

土と畳と雨の匂いだけが時を浸してゆく真夜中に身動きは取らず
母の帰りを待ち続けている

「雨3」

夏の夜、カーテンは呼吸する、
間合いから差し込む一瞬のフロントライトが天井に作る世界

愛は等しく私に隣人に、物質に内包されている
私たちが深く地底に眠っていた頃から目覚めた今も

「夏1」

雲の口からバラバラと言葉がこぼれ落ちる
夕刻、街がオレンジ色に灯る前に
風は幾多の樹木を揺らし続けてきた
私たちだってそれを知っている
調和、私のあなたの驚きはいつもこの道の見えない程遠くにあり行間に足を取られ歩いていて突然世界は「アッ」と幕を閉じるのではないかと傾げ続け増幅し続けている心はこの調和の中で隠れてしまった

「夏2」

終わりあることを引き延ばそうとはしないが
ここは私たちの唯一の水飲み場であり
オリンピックの夜の冷たい枕の匂い
私たちはもう少しここに隠れている

「夏3」

柔らかいボールが段々と弾んで少女の手の中へ帰る
白色のネオンに輝く彼女はいつも目の前のものを見ようとしない

夜に鳴る風鈴の音を聴いて庭木の一葉が舞い降りる
家族の契約は真夜中に交わされる

夜のあちらこちらからオレンジ色のまぼろしが子供たちを掴み取り此岸と彼岸の淵へ
そっと置き去る

「夏4」

放埒な感情一つ一つすべての痕跡である真夏のサンダルを履いているひとは
紫色の煙が朝靄に混ざり合いゼラニウムが香り立つ頃、あたらしさの射程に折り重なる

私たちがそのまま真昼に出会うならば
私の頭からあなたの頭から大聖堂の鐘の音が鳴りわたる

「夏5」

滞留する円形の摩天楼の上で薄紙一枚の距離に近付いた私とあなたの体について
私が憂鬱の手を差し伸べればあなたの体は私が差し出した分だけの曲線を描く

「夏6」

いかなるかたちをあてがうこともできない事柄が誰にでもひとつやふたつある
完膚なきまでまとわりつく季節に相応の孤独と悲しみがある
青天を突き刺すゴシックの尖塔でさえなお滴る程豊潤な未練と共に生きていることを知る

「(無題)」

彼女は大地と歌である、生命
ただ在る、ただ生きる
理念はない、それゆえ遅滞はない
在るために在る日、生きるために生きる日

ペンギンとパイヌ

連載第2回

いちろ まみ

あらすじ

前回、クラスの友達に紹介されてアルバイトの面接に来た、ペンギンのぺんちゃん。紹介された場所はなんと上野動物園でした。様々な動物に助けられながら、無事面接を終えたぺんちゃんは、一日研修をして採用が決まるということに。ぺんちゃんにとって初めてのアルバイト。どうなることやら……。

ぺんちゃんは、南極大学から日本のある大学に留学中。この物語は、ぺんちゃんと相棒のイヌが織りなす不思議なお話。

第3話 アルバイトの一日研修

ペンギンのぺんちゃんは、上野動物園でアルバイトの研修をすることになりました。ペンギンコーナーまで、白ひげ園長が連れて行きます。

園長がてくてくてくて、ぺんちゃんがべたべたべたべた。

今日は一日中、絶対に気を抜けません。採用がかかっているのです。ぺんちゃんは深く息を吸い込み、早足で歩きました。白くまのコーナーが見えてきたとき、園長が言いました。

「あの隣だよ」

指さされたその場所は、まるでミニチュアの南極のようでした。海に入って泳ぐもの、陸地でおしゃべりしているもの、たくさんのペンギンたちが1つの空間に集まっています。ぺんちゃんは南極の匂いを思い出しました。ペンギンのひんやりした香りです。

園長に連れられるまま、ぺんちゃんは裏の通用口から柵の中に入って行きました。

「今日一日、研修をしてもらうぺんちゃんです」

園長が紹介すると、ぺんちゃんはぺこりと頭を下げました。すると、一匹の派手なペンギンが言いました。

「ちょっと、園長。水、出してくれませんか？ 朝来た飼育員、忘れていったんだけど」

園長が飼育部屋に入っていくと、みんなそろそろとシャワーの下に集まってきました。とまどいながらぺんちゃんも、みんなと一緒に一つの場所に固まります。研修の初めての活動は水浴びとなりました。シャワーの水が始めると、ペンギンたちが一斉に上を向きます。

「あんだ、どこの出身なの」

さっきの派手なペンギンが話しかけてきました。

「南極の北の端です」

かかった水を体を振ってはねさせながら、へんちゃんは答えました。

「あーら、そう。じゃあちょっと寒がりね。園長の水ってちょっと長いから、寒かったら私の下にもぐりなさいね」

ペンギンコーナーのペンギンたちは、生まれも育ちも職業も、みんなばらばらです。へんちゃんのように学生のペンギンもいれば、夢を持って来日したフリーターのペンギン、夜は別の仕事を待つペンギンなどさまざま。派手なペンギンがいました。

「私なんて夜はペンギンバーで働いているのよ。あんたも来る？ 儲かるわよ。水を忘れるなんてほんとあの飼育員、ペンギンをバカにしているのかしら。乾いて干からびろってのかしらね。そうそう、あんた、南極の北って言ったわね。私のおじさんもその辺に住んでたのよ。私？ 私は東の端よ。星が一番きれいに見えるところ。おじさんも寒がりだったわ。海に潜ってるときに行方不明になったんだけどね。それはそうと、あんた学生でしょ？ 何の勉強してるのよ。日本語？ そんなに住んでれば話せるようになるって。そういうば、あのペンギンも……」

ひたすら早口で喋り続ける彼女を止めることができません、へんちゃんはふんふんと相槌を打っていました。頭の中では、園内で出

される食事は何かということばかり考えていました。イワシ、サシマ、サケ、サバ……いろいろ選べる回転寿司だったらどうしよう！

「ってわけだったの。ほんとあのペンギンったら、……あーら、もう休憩の時間だわ」

園内のチャイムが鳴り響くと、一斉にペンギンたちが時計の方を向きました。ペンギンコーナーの休憩は交代制です。必ず誰かがいるように、二つのグループに分けています。へんちゃんは初めのグループでした。

「またあとでね」

派手なペンギンの話から解放され、へんちゃんはひと息つきました。ペンギンとひとくちにいても、おしゃべり好きなペンギンもいれば聞くのが好きなペンギンもいます。けれどだいたいの場合、おしゃべりペンギンがいるとその周りには同じおしゃべり好きが寄ってきて、みんな勝手に自分の話ばかりをしています。まとめる気持ちはありません。いつも一方向のおしゃべりが、びぎびぎびぎびぎ続きます。

休憩に入ると、みんな裏の飼育部屋で固まっておしゃべりを始めました。へんちゃんはペンギンコーナーから抜け出して、園内の散歩に出かけました。

第4話 ふぁうふぁうと出会う

道をへたへた歩いていると、緑の木がざわざわと揺れ始め、へんちゃんの上に葉っぱが落ちてきました。見上げると、キリンが首を伸ばしてお食事中です。

「キリンさんはお腹がすいたらいつでもごはんが食べられるんだ」

長い首をうらやましく思いながらキリンコーナーを抜けると、びゅうっと突風が吹いて、へんちゃんの上に葉っぱがたくさん落ちてきました。すると、葉っぱの間からりんごが一つ、ころころと転がってきました。

「りんごの落とし物へぎ！ 食べちゃえ」

へんちゃんは勝手にりんごを食べ始めてしまいました。くちばしでりんごをつつきます。ツンツンツン。甘い汁が出てくると、今度はくちばしをうまく挟んで飲み始めました。シユルシユルシユル。

りんごを夢中で食べていると、へんちゃんがいる部分が突然日陰になりました。へんちゃんは首をかしげながら振り返ります。すると……

そこにいたのはへんちゃんの体の何倍もある象。檻の間から伸びた長い鼻がへんちゃんのすぐ後ろまできており、先がひくひくしています。

「ふぁうふぁう、お前オシのりんご食べたな、ふぁうふぁう」

象の目がきらりと光ると、突然鼻が生き物のように動き始め、へんちゃんの体をへるへると巻いてしまいました。そしてスルッ

と檻の中に引きずりこみ、へんちゃんの体を高く上げました。りんごがぼとりと地面に落ちました。

「わあ！」

空を飛んだことのないへんちゃんは空中で大声をあげました。

「ごめんへぎ！ 許してへぎ！ りんご返すへぎ〜〜」

へんちゃんは象の鼻に巻かれたまま、空中で逆さにされたりぐるぐる回されたりしました。そしてときおりぐぐぐと締めつけられました。苦しくなりへんちゃんがべいべい鳴いていると、象は自分の目の高さまでへんちゃんを近づけ、じっと見つめてきました。

「夕飯半分あげるへぎ！ ペンギン語教えるへぎ！ 掃除するへぎ！ 何でもやるから許してべい……」

へんちゃんは象の目を見ようと、目をかっと開けました。ぎゅっと鼻で巻かれているせいで、象の顔にピカピカ火花が散ります。目が合うと、象が突然へんちゃんを地面に下ろし始めました。

「許してくれるへぎ？」

地面に下ろされ、へんちゃんがころころ転がっていると、象が言いました。

「オマエ、いつもイ又と一緒にいるふぁう。オシ、沖繩象のふぁうふぁう。イ又も沖繩出身。オシたち同じ大学ふぁう」

この象はイ又と知り合い。しかも、へんちゃんとも同じ大学なのです。なんと偶然でしょう。

イ又はへんちゃんとは違い、正規の学生です。受験を突破した後、上京するためにふぁうふぁうの背中に乗って海を渡ってきました。イ又とふぁうふぁうは夢を持って共に上京してきた仲間な

のです。思ってもみないところで、友達の輪が1本につながりました。

ペンちゃんは起き上がって、ふあうふあうの鼻にひれを当ててすりすりしました。友達の印です。

ジャラジャラジャラジャラ!

そのとき、休憩を終えるチャイムが鳴り響きました。

今日は採用を決める大事な日。ふあうふあうのりんごを勝手に食べたことや時間外休憩が見つかったら大変です。

「早く戻らないと!」

ペンちゃんはばたばたとひれを振って慌てふためきました。駆け回るペンちゃんにのっそりとふあうふあうが言いました。

「ふあうふあう、裏から行けば大丈夫ふあう」

ふあうふあうは動物たちだけしか知らない裏道を知っていました。裏道を進めば園内全ての檻につながっているのです。ふあうふあうはペンちゃんを優しく鼻で巻いて、裏道へと押し出してくれました。

「ありがとう。また来るべき」

ペンちゃんは草が生い茂った裏道をがさがさと走って行きま

した。
ガサガササッ、コテッ、ヘタヘタヘタヘタ、コテッ、ガサガササッ。

だんだんと陽が落ちて園内が赤く染まった頃、ペンちゃんの一日研修も終わりを上げようとしていました。結局ペンちゃんは何

食わぬ顔でペンギンの群れに混じり、えさの魚肉ソーセージをペろりとたいらげ、ミニチュアの海の中をすいすいと泳いで過ごしました。閉園となり、園長室に呼び出されました。

「ペンちゃんさえ良ければ、授業のない日にシフトで入ってくれるかな?」

園長は自慢の白ひげを触りながら言いました。

「へい!」

こうして、ペンちゃんの採用が決まりました。ふあうふあうという新たな友達もでき、ペンちゃんは新しい生活に胸を躍らせて家路を帰っていききました。

「イヌに話そうっと! ペひひひひ」

お話に出てきていないイヌが言っています。

「ペンちゃんばかりで寂しいわら」

次回はそろそろイヌのお話をしましょう。

くっくく

七女想百景

その2

マチコ・スペースワールド

先達て
某遊園地に
行ったのだが：

30分まち

作者

並んでいる時間という
のは暇なもので
つつい周囲に
いる人を観察：

で、前にいたのが
こんな男女で
ありました

！
派手！

たぶん中学生
くらいかな

モッ
サリ
ッ
ッ
ッ
ッ

ふむ…

作者は地味な女なので派手ごとを描けない

●中2-5の岡崎さんと柴田君
2学期に席が近くなったことをキツカケに
2人の中は接近しお互いに意識している。
勇気を出して岡崎さんを遊園地に
誘ったのは柴田君のほうだった：

ふっふっ
ふっふっ



もしかして柴田君ってわたしのこと☆
：がつつりおしやれキメてきた岡崎さんだが
柴田君は前日緊張して眠れず寝坊
頭もボサボサだし急いで着てきた服もイマイチ
ちなみに私は今柴田君にとても萌えている：
あの寝癖がたいそういと思う：

その時：

キヤ





あれは…

ブルブル

ガヤガヤ

いわゆるダブルデートっちゆうやつやな…
 そしてあれはウソ泣きっちゆうやつやな…
 男の気を引くための手段…

もう1人の女は内心
 ウザっ
 と思っているであろう…

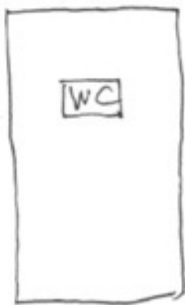


うおっしやああああ
 確かめちやるけえのおお!※
 あのかわゆい乗り物が
 どんだけ
 泣くほどこわいか

この時、1日の中で
 最もテンションが上がった

その後、吐瀉

(けっこうな乗りもんだった…)



※山口弁

About movie

今日観た映画・・・「精神」

監督: 想田和弘 公開: 2009年6月

公式HP: <http://www.laboratoryx.us/mentaljp/index.php>

精神病患者の世界にカメラを向ける。その話題性とはウラハラに実に単調な映画だった。その理由は明確だ。カメラを向けた先に映る人々があまりに普通だから。

おそらくそれが監督の意図なのだろう。カーテンを開けたい。作中で監督が言う言葉だ。カーテンを開けた先にあったものは、こちら側と変わらない世界。ふたつの世界をつなぐため、この映画はあえて単調に作られているのだと思う。

精神病である自分をどうやって受け入れることができたのか? とある患者に監督が聞く。健常者だって完璧な人間はいない。たまたま今は健常者としてやれているというだけだ。患者はそう答える。その通りだ、と思う。だけどそのくせ「健常者」という言葉の響きは限りなく重い。

作中で最も印象的だったのは、精神病になったきっかけを患者が話すシーンだ。ある女の人はきっかけを尋ねられながら、それはあの時、あの時、あの時と自分の人生を際限なくずると話し続ける。またある男は断言する。テストを全部白紙で出したあの時。あの時から俺はこっち側の世界に来た。

何かが決定的に違ってしまう瞬間。それはどこにあるんだと考えると怖い。先日猛烈に仕事をしたくないという衝動に駆られた。とにかくこの席に座っているのが嫌だ。私は席を立ち、会社のまわりをぐるぐる1時間以上も回り続けてしまった。(その後席に戻って何食わぬ顔で仕事を続けた。)

そういうことはたまにある。人に発見されていないから良いものの、知っている誰かに見つかれば、それがわたしにとっての「あの時」になり得るのではないかと思うような瞬間。

そう思えば、わたしはこの映画の登場人物達を近くに感じる。だけどわたしも同じだ。なんて言ったら、何が分かるんだと彼らに怒られるように思う。誰だってつらい、なんてことを言ったら彼らを否定することになってしまうだろう。近づくことなんてできない。そこに線があることでわたしはわたしを引き留めることができる。そして、そこに線があることで彼らは彼らを守ることができるのだ。本当は違いなんてないのだとしても、わたしたちはそこに線を引くだろう。

例えば殺人を犯したとする。その瞬間が来たからと言って、自分が全て変わってしまうわけではない。昨日の続きを生きるだけだと思う。だけどやっぱり昨日と今日は決定的に違ってしまう。人を殺したいと思うことと人を殺すことは決定的に違うからだ。

だけど何が違ってしまうのだろう。

わたしにはそれが分からない。

分からないまま、わたしはカーテンを閉めた。

鳩山 豆子(はとやま まめこ): 1982年生まれ山口出身。映画をコヨナク愛する。最近のおすすめ映画は「俺たちに明日はないッス」。

チキンボール 詠人不知

『チキンボール』

それは臆病玉。

貧乏人の強い味方。

今これを読んでも、独房生活の衆人達へ、底辺からてっぺんを睨んでもイカしたイカれた目ん玉へ、坂の途中汗だくの酔くせえシャツへ、くそあち～夏に鳴いたヒグラシ達へ、毎晩の歯ぎしりで、俺は野良犬歯状態、絵に描けばギザギザ、ハートの子守唄、わかってくれとは言わないが、そんなに俺が悪いのか？いや、望んだんだよ、挑んでんだよ、なあ、うかね～顔、未来のチャンピオン達よ。

「俺は腹が減ってる、むちゃくちゃハングリーって事だぜ」

って思いっきり開き直ろう。

そんなヤツらにレクチャーするぜピーポー。

ピーポーピーポー運ばれる前に、飯食う金をまずは探そう。

いたる所を探したが、所持金は鈍く光る100円、熱い思いとは裏腹に、熱い缶コーヒー握りしめる事すらもできない時代だぜ、尾崎。

じゃ～どうする、泣いてチンピラ、ギャングスタ。

銀行強盗、空き巣、窃盗、弁当泥棒でワッパブタ箱。

「へい、ポリスマン、俺は今堀の中だマン」

確かに朝昼晩、飯は食えるがくさい飯。

そこでスーパーで試食する事を選択しよう。

3日目まではギリギリセーフ。

「う～ん、これうまいなあ～、買おっかな～」

とか適当にうまい事言いながら1周目のヤツらに紛れる。

たまにガキが、

「ママ～あの人、また食べてるよ～、ボクもまた食べたいよ～」

とか、いきなり人様を指さし抜かす事があるが慌てるな。

慌てた方がかえって怪しく、万引き犯と間違えられ、Gメーン、それこそくさい飯。
それでなくても3周目で怪しいのだから、その時は試食係のでっぴりしたおばはんに、

「いや～これうまいもんでついつい食べちゃいますな～焼いてるおばはんが焼き豚でハラミ・・・いや焼いてるお姉さんが綺麗だから更にまたうまくなりますな～、わっはっは、1個買う事に致しまひょ～ウキウキ♪ブヒブヒ」

とかインチキ笑顔で適当に言って1つ手にとり、クソガキには思いっきりメンチをきって目で殺害しその場を立ち去ろう。

あとで手にとった商品は、その辺に放っておこう。

これがベテランに達すると4周目以降、髪を横分けにしたり、声色を使ったり、だて眼鏡をかけてみたりと、いろいろなバリエーションを楽しめるようになるという事を、あえて付け加えておこう。

さて、いろいろなスーパー試食を転々としたスーパー試食常習犯の行き着く先はどこだ？

ベテランに達し、変装バリエーションを習得した事から、ヨネスケまでをも装い、『隣の晩御飯作戦』を決行しようと茶碗と箸を持つ手に力が入るかもしれないが、醤油貸借契約を交わしてるような素敵なド田舎でないと、これは危ない橋だ、やめておけ。

これまたくさい飯。

出来る事なら、くさくない飯を喰らいたい。

では、くさくない飯とは何か。

考えたが所詮はボンクラ、逆にくさい飯、臭いのきつい飯ばかりを考えてしまい、結局、

『ドリアン』

で渋々落ち着いたが、空腹は全く落ち着かない。

「どうなん？」

類は友を呼び、似たような当たりのない貧乏くじ野郎にナムアミダブツ、ろくでもないがいちかばちか、門を叩き聞いてみた。

「ブラウン管に頼るんだよ、キューピーのあれ。何分クッキングだっけ、あれ」

「さ・・・、3!? 阿呆になるぞ、このやろう！って言うか1か8か聞いてんだよ、こ、この阿呆！」
俺達の位置は全然変わらず、腹の虫が鳴りやまない所か、この阿呆のせいでかえって虫の居所が悪い。

「畜生！！うりゃ～死にやがれ～！！」

とじゃれ合い半分で殴りかかるふりをしただけなのに、阿呆が殴られたふりで吹っ飛びやがり、ちゃぶ台で頭をぶつけ、打ち所が悪く死んでしまった・・・となれば、またまたくさい飯であり、阿呆と言えど友であり、阿呆ん事、阿呆事や、阿呆式で涙し、その後も阿呆を思いながら生きていく事を考えると、殴る所か殴るふりすらできない。

そんな事を考えている隣で阿呆は、1でもなければ8でも収まらんであろう何流大学かも知らん黄ばんだ大学ノートに、何やらニヤニヤしながら書いておられる。

チラッと盗み見ると、ミミズ文字を並べておる。

1. スシ
2. やき肉
3. うなぎ
4. すきやき
5. ハンバーグ
6. からあげ
7. さしみ
8. すし
9. カレー
10. デラミス

「おい、これ、何を書いてるんだ？」
と問うと、

「喰いたいリストに決まってるだろ！阿呆！」
と阿呆が阿呆呼ばわりしやがる。

最初にいちかばちか、この阿呆に聞いた俺がそもそも阿呆だったと情けなくなったので、さっさと雪駄を吐き、門を出る直前で、

「1も8も一緒やないか、阿呆！ほんで10のデラミスってなんや、阿呆！人生ミスばっかや、阿呆！」
と罵り去った。

その後、6畳の独房で、

「実家に帰ろうか・・・」

などと独り言の弱音を吐き、臆病になった時に、ある事を思い出した。

以前、この独房で仲間達を集め、押しくら饅頭状態になりながら寒さを凌ぎ、皆が食材を持ち寄ってやった鍋パーティーの事を。

そう言えば！

坊主頭の宴会番長が持ってきてくれたアレ。

冷凍庫を開けると、あった・・・チキンボール！

冷凍品なので長持ちし、めちゃくちゃ入ってる。

「た、助かった・・・」

臆病玉を喰らいつくせば力がみなぎってくる。

「やってやる、やってやる！」

『チキンボール』

それは臆病玉。

貧乏人の強い味方。

【『貧乏人の基礎知識2005』より】

今も独房の冷凍庫にはチキンボールが常備されているのは言うまでもない・・・。





魚の皮膚 一路真実

1

コツコツとハイヒールの踵が床を打ちつけて、僕の方へと近づいてくる。僕は顔を上げずに、その音を聞いていた。

昼下がりの授業はとても退屈で、窓辺から差し込む暖かい光が学生の周りをまどろっこしく付きまとう。学生の大半は、そのだるさに侵されて、机に突っ伏して寝ている。無機質な教授の声が空気の中に激んでいく。教室中の埃がその言葉に憑くようにして、輝きながら漂っている。

「隣、座っても良いですか」

ハイヒールが声を掛けてきた。僕は両手で額を支え、教科書を読んでいるふりをしていたが、そう言われて隣に置いてあった鞆を移動させた。

少しだけ目を上げて、彼女の顔を盗み見た。肩で切りそろえられた、少し多めの黒髪が印象的な女性だ。僕の隣に座り、足を組む。ほっそりとした白い足が、ピンク色のミニスカートからむき出しになった。

聴衆である学生が寝ようが遅刻してこようが、そんなことはお構いなしに言葉の行列は宙に浮き続けていく。黒板は一向に埋まらない。教授は教壇にただ立ち尽くして、ひたすらに口を動かしていた。

「だからね、先ほどから申しているように、次はどのような主張でいくべきかということなのですよ。これまでの構造主義もだめ、本質主義も。二項対立では解決できないということですな。だからといって、脱構造主義や構成主義でもなく、もっと新たなパラダイムが必要なのです。そうした時代にきていると……」

教授の目の前に陣取っている学生だけは、必死に何かを書きつけていたが、後ろの方に座って

いた僕の周りは、ぼそぼそと喋る教授の声をかき消すかのようにおしゃべりに夢中だった。合コンの連勝記録と女性の身体の話ばかりで、教授の言葉と同様にただ羅列されていく刹那的な主張に、僕はいささかうんざりしていた。

ふと隣の彼女を見ると、熱心に筆を走らせている。スカートと同じ艶やかなピンクのマニキュアの先から、無数の黒い線が書かれていた。しかし、それは文字ではなかった。僕は目の端で彼女のノートを凝視する。彼女の指先から現れたのは、無数の「素足」のデッサンであった。

後から分かったことだが、彼女は柏木さんという名前だった。同じ学部だが、彼女の方が一学年先輩である。

授業の終わりを知らせるチャイムが鳴ると、彼女が僕に話しかけてきた。

「ねえ、モデルになってくれない？」

僕はちらと素足のデッサンを見ると、

「もしかして、それの？」

と言った。彼女はピンクの爪を唇にあてるとにこりとほほ笑んだ。大きな目は、ほほ笑んでも細くはならず、強烈に僕を見つめ続けていた。

僕は流されるままに、彼女のデッサンのモデルをすることになった。

喫茶店に入るとすぐに、店員にブレンドと言ひ、窓辺に向かった。薫は僕には気付かずに、熱心に小説を読んでいた。待ち合わせをしても、たいていは僕の方が早い。今日はおそらく、授業をさぼって喫茶店に入り浸っていたなど僕は思った。

「どうにもならないよ、毎日が」

小説をぱたんと閉じると、薫が突然言い始めた。僕は黙って向い側に座り、煙草を取り出して火をつけた。

「今日は授業だったでしょ？」

意外にも全く減っていないカップの中のダージリンを見ながら、僕はそう言った。

「授業に行く気分じゃないもの」

彼女は首を傾げると、栗色の毛先を指で挟んで持ち上げる。突然毛づくろいを始める猫に似ていると思いながら、煙草の灰を落とした。

「どうにもならないって、何が？」

薫は何も答えず、代わりにこう言った。

「一〇〇人の人が私のことを好きだって言ったら、あなたはその後ろに並んで一〇一人目になる？」

今度は僕が黙る番だ。

薫は時々この手の質問を投げかける。何が言いたいのか分からない。でも、僕は答えを知っている。答えはノンだ。彼女の問答の答えはいつもノンなのだ。

「ねえ、ったら」

しかし、彼女は答えを待っていない。自分はノンを求めているも、相手にノンだと言われたくないのだ。そういう質問ばかりである。僕が彼女と一年弱付き合ってきて、出した答えはそれだけだ。つまり、僕は何も言えない。

「もういいよ」

彼女は窓の外を見た。何かを思い出して、ふっと笑う。口から小さな八重歯がそっと覗く。それを見ながら、僕はにやけるのを我慢してブレンドをすすった。

「ねえ、明日の午後あいてたよね」

彼女が目を輝かせて、顔を近づける。僕は言った。

「一週間ぐらい前に、授業で一緒になった女の人にデッサンのモデルをやってくれないかって頼まれたんだ。明日はそれに行かなくちゃ」

ぷうっと膨れた薫のほっぺに触れて、僕は

「うちにおいでよ、今日」

と誘った。彼女はまた八重歯を覗かせて、小さく頷いた。

その夜は散々で、僕は粉々に砕けてしまった。

一緒に映画を観たところまでは、薫もはしゃいでいて、楽しそうにしていた。次の記念日にどこへ行きたいか、何が欲しいかなど、明るい表情をくるくるとめまぐるしく変えて話していた。

でも、そのあとトイレから戻ってきた彼女はとても静かで、

「この狭い空間から自由になれるの？」

と何度も訊ねてきた。例によって、答えはノンなのだけど、僕は何も言わなかった。静けさが部屋を支配し、薫が僕の肩に頭を乗せてきたので、僕は彼女の肩を抱いてそっとベッドに押し倒したのだ。すると彼女は、さらに

「もうこんなところは嫌よ。どうにもならないじゃない」

と言って、真っ青になって泣き始めた。僕はとりあえず、彼女を抱きしめようとしたのだけど、その手を払って薫は部屋のドアに駆け寄った。ドアを背中にしながら、薫は次から次へと涙を流し、

「どうにもならないの、毎日が」

と、絞り出すようにして訴えた。僕は、

「薫。落ち着いて、こっちにおいで」

ゆっくりとベッドから立ち上がると、薫は怯えた表情をしてさらにドアの方へ下がった。そして、一言ずつ囁みしめるようにして言った。

「さっき、生理になったみたい」

すると、机の下にあったバッグをまるで獲物を捕まえるかのように、さっと取り上げて、彼女は玄関へと走った。僕は、とっさにその腕を捕まえた。

「終電、もう行っちゃったよ。隣で一緒に寝たらいいじゃない」

彼女は僕の手小さな手のひらを添えると、

「友達のところに行くから大丈夫」

と言い、にっこり笑って出て行った。

薫は躁鬱が激しい。生理前後はさらにひどい。まるでこの世に未来なんて存在しないかのように落ち込み、些細なことをずっと気にしている。そうかと思えば、通り雨が上がった後のように、大きな目をさらに見開いてケラケラと笑い喋る。女性なんて皆そうだろうと思っていたが、薫は特にその振れ幅が大きいようだ。

薫が去って、静かな部屋に一人残された。僕はベッドに転がって天井を見つめる。

どうにもならないことばかりなのは、僕の方だ。

頭を抱えて横になった。こういう気持ちになったとき、いつも僕は流れのままに任せる。大きな力で押し流されれば、岩だって橋だってなんだって流れていく。僕は目をつぶって、激流にのまれて遠くへ行ってしまう僕の身体を想像していた。

柏木さんは、僕の足をじっと見ていた。

「そこに座って、靴と靴下を脱いで」

そっけなくそう言うと、窓辺に置いてある木製の長椅子を指した。隆々と突起した胸筋を惜しげもなく披露する石膏像に囲まれ、僕は何だか居たたまれなく感じる。僕が靴下を丸めるその瞬間まで、柏木さんは食い入るように足を見つめていた。その表情は、まさに欲望に突き動かされる獣のようである。僕は注ぎ込まれる光を背に色褪せた長椅子に座り、柏木さんに言われるがまま素足を投げ出す。

「もうちょっと右足を倒して」

僕は壁に背をもたれかけて後ろ手をつき、無造作に足を差し出した。彼女は床に這いつくばるようにして、僕の足を描き始めた。シュツシュツという音が部屋に響き渡り、黒鉛が右へ左へと忙しく駆け巡る。彼女は短いタイトスカートを履いているにも関わらず、尻を突き出しており、僕は彼女の格好と時折覗き見えるタンクトップの隙間の乳房が気になって仕方なかった。

もしかして、彼女はこうやっていつも男を誘っているのではないか？ デッサンのモデルと称して、部室棟の端にある美術研究会の部屋で情事に耽るのが彼女の唯一の愉しみなのではないだろうか？ 徐々に形になっていく素足のデッサンと同じ線上にある柏木さんの胸の膨らみを見ながら、僕はぼんやりとそんなことを考えていた。

「どうして、素足ばかりを描くの？」

そう訊くと、彼女は筆を止めずに答えた。

「素足ってとてもエロティックじゃない？」

僕が曖昧に唸ると、彼女は続けて

「いつもは靴や靴下に包まれてて、素足ってそれがむき出しにされるのよ。露わになってみたら、何かある一定の事柄にしか使えないような短い指がうねうねと動いて、そういうのってすごくエロティックだよ」

柏木さんは妖艶な瞳で、舐めまわすように僕の素足を見つめると、そっと甲に触れた。不意を突かれて、僕があっと短い声をあげると、彼女はゆっくりと甲を撫で始めた。

「そして時々、生臭くてじっとり湿るところなんて、まるで違う生き物みたいなもの」

そう言うと、僕の足から手を離し、再びキャンバスに意識を集中させた。僕は彼女のしなやかな手の感触をもう一度反芻すると、高鳴る心臓の音を静めるのに必死だった。

そうして時間が過ぎ、西日に陰りが出始めた頃、彼女がもう帰っていいわよと声をかけて、お開きとなった。

構内のベンチに座って煙草をふかしていると、巻き髪的女性が近づいてきて、僕にこう言った

。

「この前は、どうもありがとうございました」

僕が彼女の顔を見ながら、何かを思い出そうとすると、彼女は間髪入れずに言葉を繋げた。

「同じアパートに住んでて」

彼女は僕と同じアパートの住人で、しつこい新聞勧誘に遭っていた。家を出る時までつきまといわれていて、下の階に住んでいる僕とちょうど廊下で鉢合わせた。僕が警察を呼ぶぞと一喝したことで、勧誘が来なくなったのだと言う。

彼女の名前はエレナと言った。それはおそらくニックネームなのだろうけど、僕はそれ以上訊かなかった。彫りの深い顔立ちと明るい茶色の巻き髪、良く焼けた肌の色は、外国人の血が入っているようにも見える。あまり深く入り込まないようにしようと、僕は何も言わなかった。

エレナの部屋は僕の部屋のちょうど真上にある。

ある夜、僕の携帯電話がピリピリと部屋の空気を震わせた。

「もしもし」

「ベランダに出て。早く」

エレナが、慌てた声で言う。僕はカーテンを引っ張り、急いでベランダに出た。

「壁を見て」

道を挟んだ向かいの壁に、僕の影と真上の階のエレナの影が映し出されていた。部屋の明かりを遮る人影が二つ、クリーム色の壁にくっきりと映っている。エレナが電話越しに言う。

「すごいでしょ」

エレナの影が手を振る。僕は影でピースサインをした。

「今度、うちにご飯食べに来なよ。どうせ一人暮らしでまともなもの食べてないでしょ」

彼女は続ける。

「来るならマル、来ないならバツ」

とっさに、僕は両腕で丸を作った。

「よろしい」

僕は、エレナに言った。

「この前のお礼ってこと？」

エレナの影は、両手で何かを形作った。それが一瞬のことで、僕はよく分からなかった。

「それじゃあね」

エレナは一方的に電話を切り、部屋に入って行った。エレナの手がハート型を作ったような気がしたが、もしかすると正解のマルだったのかもしれない。

もしくは、どちらでもなかったのかもしれない。

薫の情緒不安定は相変わらずで、生理が終わってもなお、躁鬱を繰り返している。僕の方もそれが分かっているので、いつものように適度な距離を保つ。これまでも、そうしながら彼女とうまくやってきたのだ。

その一方で、週に一度は柏木さんのデッサンに付き合っていた。その度に、僕は彼女の艶めかしい魅力に全身が気だるくなってしまい、彼女のことがもっと知りたくて仕方なかった。表面的なことだけでなく、彼女の素足をもっと知りたくっていた。

また、いつものように素足を投げ出し、僕は長椅子に座らせられた。彼女は僕の足元に膝を落とし、向い合う格好になる。柏木さんの両手が僕の左足に触れ、ゴツゴツとした皮膚に沿って、何かを確かめるようにゆっくりと撫でる。まるでとても大切なものに触れているみたいだ。そのまま僕の足にしゃぶりつきそうなぐらいに、目を見開いてゆっくりと撫でていた。僕は口を開いた。

「男性の素足じゃなきゃだめなの？」

彼女はぴくりと手を止め、

「女性の素足は、刺激が強すぎるわ」

と言って、ふっと笑った。彼女は僕の爪を触り、

「女性のペディキュアが、素足の無防備さを象徴するのよ。強そうに武装しているように見せて、結局は攻め込まれる以外に道はない」

彼女は僕の足から手を離して、すっところちらに身を寄せた。そして、僕のジーンズに手をかけると、

「もっと足の付け根から描きたいの」

と言って、ベルトを外し始めた。

柏木さんは僕の股の間に割り込むように座っており、僕は対角線上のドアがとても気になった。今このドアが開いたら、まるで彼女が僕の性器を弄んでいるようにしか見えない。されるがままに、ジーンズを下ろす。僕のじっとりとした気だるさがすべてトランクスの中に集中していたが、もう僕にはどうしようもなかった。今さら冷静にもなれない。柏木さんは僕のトランク스에目を落とすと、ビビッドなピンクの爪を口元へやり、艶やかな唇で噛みしめてにやりと笑った。

突然背後でコンコンと音がして、ドアがゆっくりと開いた。そこに立っていたのは、薫だった。

薫の顔から血の気がさっと引き、表情が凍りつく。柏木さんが僕の太腿に手を置いたまま、ゆっくりと振り返る。薫は僕と柏木さんの顔を交互に見ると、踵を返して早歩きで去って行った。ドアが時間差を置き、緩やかに閉まっていく。柏木さんは、股の間から上目づかいで僕を見上げると、

「追いかけなくて良いの？」

と訊いた。

薫を見つけるのは容易だった。

彼女はいつも、時間を見つけては大学の隣にある公園のベンチに座っている。そうして、公園を散歩するマダムたちが連れてくる犬をひたすら眺めている。僕は部室棟を抜けると、真っ先に公園に向かい、そして薫を見つけた。

遠くで既に目があったはずなのに、薫は無視して犬ばかり見ていた。僕が彼女の隣に腰かけると、ようやく一言、

「デッサンのモデルって、ああいうことなんだ」

と、馬鹿にしたように息をもらした。

「誤解だよ」

僕が彼女の顔を覗き込むと、

「私のことが嫌になったの？」

と、彼女は曖昧に笑った。僕は強い口調で言った。

「なってない」

答えはノンだ。ノンでしかあり得ない。彼女の口元は曖昧な笑みを湛えたままだったが、目は虚ろで最早僕のことと周りの犬のこと、何も見えていないようだった。世界は動いていたけれど、彼女の表情だけは一時停止のままだ。

「もう私のことを救ってはくれないの？」

今の彼女は鬱の薫だ。弱気で、だんだんと泣きそうな表情になる。僕は言った。

「デッサンのモデルなんだ。画家が命令した通りに止まらなきゃいけないんだよ。僕の意味じゃない」

突然、彼女の顔が変わった。

「だから、あなたはいつも漂っているのね」

顔色がどんどん白くなっていく。雪の結晶のように冷たい表情だ。

「時には、大きな流れに乗らなきゃいけないんだ」

と、僕が言う。

すると彼女は立ち上がり、数歩進んでベンチの方を振り返った。チェックのスカートがひらりと舞い、パンプスが小さくステップを踏んだ。

「嘘でもいいから、自分で選び取ったって言ってほしかったよ。そうやって、誰かの言いなりで世界を創っていくなんて、死んだのと同じね」

彼女は後ずさりしながら、さらに大きな声で叫んだ。

「ずっと思ってたの。あなたは、何かからドロップアウトし続けてる」

そして、駆け出した。

彼女の背中がどんどん小さくなっていく。僕はもう一度、彼女の声を思い返した。

ドロップアウト、し続けてるだって？

その夜、僕は一人で部屋にいられず、気付くとエレナの前に立っていた。エレナの柔らかい肉が

僕を温めようと包み込み、その狭間で僕は何度も溺れてしまいそうになった。しかし、どんなにエレナの温もりを感じても、僕は一向に温かくならなかった。

エレナの寝息を聞きながら、僕は煙草に火をつける。白い煙が絵具を水に溶かしたように、あらゆる方向へとループ状に連なっていく。細い煙は次第に空気に溶け込み、継ぎ目がないほど同化してしまった。

僕は醜くて汚い生き物だ。きれいでいられないからこそ、少なくともきれいに見えるように、人の波に流されてきたのだ。汚れがこれ以上広がらないように、ひっそりと水面を浮かんできたはずなのに。いつもそうやってもがいてきたはずなのに、どうしてうまくいかないんだろう。

僕はやるせない気持ちになり、エレナの部屋のドアノブに手をかけた。その時、エレナが起き上って言った。

「もう帰るの？」

「今日は、ごめん」

すると、エレナは慌てて僕の腕を掴んだ。

「何で謝るの」

僕が何も言わないでいると、彼女が

「柏木さんのことが好きなの？」

と言った。彼女の口から柏木さんの名前が出てきて、僕は驚いた。

「でも、……残念ね」

そう言うと、彼女は巻き髪を肩の後ろになびかせた。肉付きの良い肩と豊かな乳房が露わになる。

「柏木さんは同性愛者なのよ」

僕は、エレナの顔を見つめることしかできなかった。声も出せずに、ただ、その場で立ち尽くした。

「私、柏木さんと同じゼミなの。結構有名よ。同性愛者だってこと」

何がそんなにショックだったのかと悶々と考え続けていた。流され続けている僕にも、どうしても流れをせき止める堤防があったのだ。スタートラインにすら立てないということが、何より衝撃だったのだ。闘う意志がないとしても、ただ闘える状況にいたかったのだとようやく気付いた。

鼻の奥に甘く残るコーヒーの香りと小さなピアノの音楽が店内を包み込んでいる。カウンターを抜けると、壁際のテーブルにいた柏木さんが右手を挙げた。マッチを勢いよく擦り、煙草に火をつける。僕が腰かけると、彼女は言った。

「あなたの彼女、また来たよ」

顔を横に向けて、すっと煙を吐き出す。彼女は続けた。

「あれから、ちゃんと連絡取ってるの？」

僕がジーンズのポケットから煙草を取り出すと、彼女はマッチを擦り、火を差し出した。

「薫は何て言ったの？」

僕が訊くと、彼女は灰を落としながら、

「あなたのことが好きなんだって」

僕はテーブルに肘をつき、両手で頭を抱えた。目を瞑ると、薫がいつものように茶色い毛先を触っている。くるくると変わる表情と、怒ったり泣いたり喚いたり、忙しい感情を抱えて、薫は笑っている。僕を必要としているくせに、わざと離れようとしたり、僕がいないと人見知りで誰とも話なんてできないのに、柏木さんに会いに行ったりするんだ。

あの日以来、薫は家に引きこもるようになっていた。電話も通じない。大学の授業にも来ない。どうしても話がしたくて、彼女の実家を訪ねたら、彼女は突然旅行に出かけたと言われた。行き先は分からないと言う。

「薫はいなくなったんだ。大学にもずっと来てない」

彼女は僕の耳元に近づくと、煙る息を吹きかけた。

「だからあなたはダメなのよ」

僕は顔を上げた。柏木さんの耳が僕の目の前にあった。

「あなたはどうしたいの？」

柏木さんはもう一度ゆっくりと耳元で言った。

「彼女はいなくなったんじゃないの。あなたが探すのよ」

「だって、行き先も分からないんだ。薫の親だって娘に無関心で、信じられる人じゃないんだ。旅行に出たなんて、嘘をついてるかもしれない」

彼女は無表情だった。どの筋肉もぴくりともしない。

「これ以上、どうしようもないよ。僕たちは、所詮他人同士なんだ」

薫の白い肌が目に浮かんでくる。細い腕を胸で交差させ、華奢な両肩を掴んでいる。あれは、初めて薫を抱いた夜だ。彼女はそうやって胸を隠して、ベッドに座っていた。あの後、薫は僕に何て言ったっけ？

「電話もしたし、家にも行った。友達にも訊いた。でも分からない。これ以上、どうしたらいいんだよ」

いつも以上にはしゃいで、僕の隣に寄り添っていたのに、突然薫は説教を始める。あれは、付き合って初めての彼女の誕生日だ。笑った顔も怒った顔も、どうしようもなく愛おしい。だけど、どうしても思い出せない。薫が何か話している。口は動いているけど、声が聞こえないんだ。薫は何て言ったんだ？

「僕は……」

柏木さんははっきりと口を動かした。

「とにかく、そんなことは関係ないの。問題は、あなたがどうしたいかってことなのよ」

「……柏木さんは、どうしたいの？」

「私は、あなたの素足をもっと描きたいわ」

薫が笑った。薫が海辺を駆ける。踏みしめる素足が砂浜に跡をつける。飛び散る砂や水しぶきの中を軽やかに走る。薫が僕を振り返って立ち止まり、また幸せそうに笑った。でも、声が聞こえない。こんなにも近くで笑っているのに。

代わりに僕は柏木さんの声を思い返した。

あなたのことが好きだ、って。

僕は顔を上げて、柏木さんを見つめた。

「僕は、薫の声が聞きたい」

柏木さんは口を緩めると、コーヒーカップを持ち上げた。

「あなたが思わないと、何も現実にならないの。あなたが願わないと、ずっと消えたままなの。ただ、それだけのことよ。闘い続けるってことは」

僕は水をぐいと飲み干した。

「ありがとう、柏木さん」

「残念なことに、私にとってはデッサンモデルがまた一人減ったんだけど」

柏木さんは笑って、マッチに火をつけた。

「さよなら」

僕は立ちあがって、店を出た。薄暗い店内に慣れた目が、鋭い光に一瞬眩む。でも、僕は足を踏み出した。歩いていけば、自然とまた慣れる。見えなくても、僕が歩こうと思えば歩けるのだ

。

(終)

あとがき



いちろまみです。
ゆるい文化系の生活に燃没した
いー。
そう思いながら、流れ星を待っ
ています。
またあなたにお会いできますよ
うに。
では、ごきげんよう☆



スピードについていけないこと
が多いので、現実にも一時停止
とか巻き戻し機能があればいい
のにとよく思います。現実には
そんな機能付いてないですが、
自分の言葉を形にすることで、
時間を一時停止することや巻き
戻すことがちょっとはできるよ
うに思います。



ずらし飛び見よ。



この度初めて参加させて頂きま
した。どうもありがとうございます。
誰もが固有の軌人であ
ると思っています。



ハンコ彫ってます。
「えっ誰だっけ？」と思った方
は、くまなく探してみてください。
ヒントは、ヘビとりんどです。



オードリー若林が好きすぎてつ
らい日々を過ごしています。
まいどすみませんが告知で・・・
■青箱の本棚冬まつり (仮)
12/13 (日) 14:00~予定
¥1,500+オーダー@KingBee
<http://www.kingbee.jp/>
詳細：<http://aoneko.from.tv/>
テクノ歌謡なかんじでマンドリン
と歌やっています。

お知らせ

星屑書房は好き勝手に表現活動をしていく創作集団です。
今後の活動予定等は随時更新します。



ホームページアドレス

<http://stardustbooks.soragoto.net/>

メンバー募集

星屑書房では随時新メンバーを募集しています。
小説・詩・マンガ・写真・エッセイ・評論
その他随々紙上でできることなら何でも有！
興味のあるアナタは下記までご連絡を！！

stardustbooks@live.jp

創星 第2号

2009年10月24日 初版

発行元 星屑書房

<http://stardustbooks.soragoto.net/>

©2009 STARDUST BOOKS, Printed in Japan.

本書を無許可で複写・複製することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。

フリーペーパー『創星』2号
2009年10月24日 初版

<http://p.booklog.jp/book/58870>

著者：星屑書房

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/stardustbooks/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58870>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58870>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ

